

皮下脂肪厚と皮膚の柔軟性との関係に相関はない

医療法人社団玉栄会 東京天使病院 理学療法士 ○古田達也、佐々木良

【はじめに】

26年の診療報酬改定においても急性期病棟に理学療法士等を配置し、褥瘡予防のアウトカムを担保することによって報酬が得られる等、褥瘡対策にリハビリテーション職種が関与する事が重要視されている。現在主流となるDESIGN-RやOHスケールなどは、看護を主体として研究されてきた分野であり、皮下脂肪厚等、受動的な圧分散に主眼を置いたアセスメントが多いが、近年ではギャッジアップ時のズレに起因する褥創が問題となっている。そこで今回我々は、積極的なリハビリテーションを実施するに当たり、ギャッジアップは必須となる事が多いことから、皮下脂肪厚と皮膚の柔軟性の関係性を考察したのでここに報告する。

【対象】

健常者18名(男性9名、女性9名、平均年齢 28 ± 8)。および、当院入院中の患者18名(男性6名、女性12名、平均年齢 84 ± 8) 回復期リハビリ実施中の比較的運動量の確保されている群9名及び、ベッドサイドリハ適応の運動量の少ない群9名を対象とした。

【方法】

非利き手(麻痺側)を上にしての側臥位にて、アディポメーターを用いて皮下脂肪厚を測定し、上後腸骨棘を結んだ線上の、棘突起から左右に3cmの所にて、頭部方向・尾骨方向・重力方向・抗重力方向の4方向に最大伸長した距離をそれぞれ計測。

【結果】

皮下脂肪厚と皮膚の柔軟性に関して、Excel統計にて相関を求めた結果、健常者は、非利き手(麻痺)側では、抗重力方向0.41。利き手(非麻痺)側では、抗重力方向0.59と、わずかながらの相関を得たのに対し、患者群では、非利き手(麻痺)側では、頭側-0.1 尾側-0.04 重力側0.05 抗重力側-0.27。利き手(非麻痺)側では、頭側0.33 尾側0.17 重力側0.02 抗重力側-0.28と、どの方向においても相関は認められなかった。

【まとめ】

一般的に、皮下脂肪量が多い若い患者の方が褥瘡発生リスクが低いとされているが、本実験より、皮膚の柔軟性に関しては、皮下脂肪量および年齢との関連性は低いと考えられる。そのため、早期から積極的なリハビリ実施をするに当たって、体圧測定等を中心とした従来の評価スケールだけでは、せん断力に起因する褥瘡発生を予防するには不十分ではないかと示唆される。